

# ちんちん、やめてー！

さえさんと あゆみさんは なかよしです。さえさんは まだ できないことが あるので、あゆみさんは よく さえさんを たすけます。

あさ、ランドセルから べんきようの どうぐを だして つくえに いれ、ランドセルを ロッカーに いれるのは、あゆみさんが いっしょに します。じゅぎょうちゆうじを かくとき、じぶんの べんきようがおわると、さえさんの てを もって いっしょに なぞります。

さんすうの じかんの ことです。あゆみさんは くりさがりの べんきようを いっしょうけんめい していました。

そのときです。よこに すわっていた さえさんが あゆみさんの うでを えんぴつで ついたのです。あゆみさんの うでは えんぴつの あとが くるく つきました。あゆみさんは なぜ さえさんが えんぴつで ついたのか わかりません。

「わたしは なにも していないのに。」

そう おもうと しらないうちに なみだが できました。

それを みていた せんせい

「あゆみちゃん、がまんすることは ない。ないでいないで、おこれ。いやな ことを  
されたら、『やめて』と はつきり いわなくちゃ。」

と いいました。

あゆみさんは  
「さえちゃん、なんで こんなこと す  
うれんで、やめて！」

と なみだを うかべながら おおごえ  
で いいました。せんせいも

「さえちゃん、えんぴつで ついちゃ  
だめ。ぜったい だめ。」

と いいました。

さえさんは、ぼろぼろと おおつぶの  
なみだを こぼしました。



## さえちゃん、やめて！（小学校低学年向け）

### A 教材設定の意図

子どもたちの関係を見てみると、たとえなかよしであっても、世話する関係と世話される関係に固定されていたり、今の関係をこわしたくなくて、遠慮して本当に言いたいこともがまんしながら、つきあっていたりすることがある。

あゆみさんは、障害を持つさえさんの世話をかいがいしくする。休み時間もさえさんが一人でいると、「さえちゃん遊ぼう」とさつと手を引く。また、さえさんがいやなことをしても、あゆみさんはがまんする。あゆみさんはさえさんと今の関係をこわしたくなくて、遠慮して付き合っているように見える。そんな関係からさらに進んで、自分の思いをぶつけ合い、互いに分かり合う関係にするにはどうすればいいのだろうか。

子どもたちはいろんな場面で自分の思いを本気で吐き出し、ぶつかり合う。そんな場面で、教師はおうおうにしていらぬ配慮をしてぶつかり合いを避けてしまおうとする。しかし、それでは、子どもたちのつながりを深めることはできない。逆にそれを互いの思いを分かり合う大切な場面ととらえ、新たな関係をつくる機会としていきたい。

さえさんは算数の時間、自分がほおっておかれたことで、あゆみさんを鉛筆でついでしまう。あゆみさんは初めは泣いてがまんしていた。障害があるうとなかろうと自分の本音をぶつけてもいいということ、いやなことは、だれであろうと、はつきり「いや」と言えるようになってほしいということ、それをあゆみさんに分かっただけでほしい。そのことによつてあゆみさんはもっと楽にさえさんとつきあえるようになり、一方的な関係から、互いの思いをぶつけ、分かり合う関係へ変わっていく。

今の関係を大事にしたいあまりに自分の本当の思いを伝えようとしていない。言っても分からない子と思つて自分の思いを伝えようとしていない。あの子は世話しなければならぬ子と決めつける。そうした子どもたちの人間観は、相手を一段低く見ることにつながっていく。学級の子どもたちの関係を再度見直し、子どもたちがぶつかり合う場面で、その子その子の思いを出させ、分かり合う機会としていきたい。

### B 教材の解説

本教材は県内の一年生の学級でのできごとを題材にしている。

一年生に入ったさえさんは、自分の下足入れが分からなかったり、座席に長時間座つていられなかったり、字がなぞれなかったり、トイレも一人ではできなかったりした。

そんなさえさんに対して、周りの子はとてもよく世話をする。下足入れにズックを入れたり、手を持つて字をなぞったり、連絡帳を書いたりしてくれる。担任はそれを微笑ましく見ていた。

しかし、周りの子の何人かの様子を見ると、さえさんができることまでつい手を出してしまったり、乱暴したりしても、真剣に怒らなかつたりする。どこかでさえさんを一段低く見ているのではないか。そう思えてきた。

さえさんを特別扱いしたり、言っても分からない子と見るのではなく、できることはさえさんにさせ、いやなことはいやとはつきり言う。そんな関係をつくつてほしい。そうして初めてさえさんも友だちの思いを受け止めていけるのだ。

そう考えた担任は、さえさんにいやなことをされたら、そのときの気持ちをきちんとしてさえさんに伝えるよう子どもたちに働きかけた。そ

のたびにさえさんは大粒の涙を流すというところで、その気持ちに添えていった。また、さえさんのできないことは手伝えばいいけれど、できることまでしてやることは、逆にさえさんに同じ一年生と見ていないことだと話した。

本教材はそんな中で生まれたエピソードの一つである。算数の時間、自分をほおっておいてほしくないとさえさんはあゆみさんを鉛筆で突つつく。なかよしのさえさんにそんなことをされて、あゆみさんは悔しい思いをする。そんな二人の思いをぶっつけ合うことで二人の関係が変わっていく。

その後、あゆみさんはさえさんにだめなことはだめとちゃんと伝えるようになっていく。また、あゆみさんが熱を出して困っているときにさえさんに助けを求めらうことで、さえさんが単にお世話される関係だけを望んでいるのではないことを知る。そして、二人は前にも増して仲よくなっていく。

さえさんを次第に特別扱いしなくなった子どもたちはさまざまな行事の中でも「さえちゃんは今まではできるはずだ」とさえさんはずささないで励まし、ときには怒りながらいろいろなとりくみを進めるようになった。その中でさえさんも少しずつ自分からとりくみに参加するようになっていった。

### C 支援の内容

①子どもたちは無意識のうちにさえさんのような子を特別視するようになっていく。何が特別視なのか、具体的に考えさせたい。できることもしてやることや、いやなことをされてもその子だからと簡単に許すことは対等な関係ではないんだということを、きちんと押さえたい。

②学級で同じような話があれば事前に教師の方で把握し、まとめて話題に出し、考え合わせたい。

③子どもたちの友だちに対する思いは、ていねいに友だちに返し、互いの思いをつなぐ機会にしたい。特に課題を抱えた子の思いは、今後の学級づくりを生かして行きたい。

### D 参考資料

・第五四回全同教大会報告

「みんなの中でRさんとのつきあいから学んだこと」

津田 康則（根上町立福岡小学校）

<p>一 導入</p> <p>①みなさんは友だちからいやなことをされたことがありますか。</p> <p>二 展開</p> <p>②「さえちゃん、やめて！」を読みましょう。</p> <p>③あゆみさんはさえさんにどんなことをしてあげましたか。</p> <p>④なぜさえさんはあゆみさんを鉛筆でついたのですか。</p> <p>⑤あゆみさんはどうしてすぐにさえさんに「やめて」と言わなかったのですか。</p> <p>⑥さえさんとあゆみさんの仲はこの後どうなったと思いますか。</p> <p>三 まとめ</p> <p>⑦みなさんは友だちに、だめなことばだめ、いやなことはいやと言えなかったことはないですか。言えなかったわけも考えてみましょう。</p>	<p>①自由に出させ、話しやすい雰囲気をつくる。</p> <p>②さえさんがどんな子かイメージできなければ、教材の解説を使って補足する。</p> <p>③あゆみさんがいろいろとさえさんを世話していることをイメージさせる。</p> <p>④いつもはいろいろと世話してくれるあゆみさんがかまってくれなかったというさえさんの思いを考えさせる。</p> <p>⑤子どもたちのこれまでの経験から自由に考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・さえちゃんのが好きだからがまんした。</li> <li>・仲をこわしたくないから、えんりよしている。</li> <li>・言っても分らないと思っ言わない。</li> </ul> <p>⑥「仲が悪くなった」「もつと仲よくなった」など、自由に予想させた後、あゆみさんはさえさんにだめなことばだめ、いやなことはいやとはつきり言うようになったこと、また、逆にさえさんがときには困っているあゆみさんを助けたことなど、互いの思いを伝え合い、分かり合うことで、二人の関係が変わってきたことを伝える。</p> <p>⑦言えなかった子については、その子の気持ちを書かせたり、聞き取ったりしながら、その後の学級づくりに生かして行きたい。</p>
---	--